

目次

はじめに	1
中国との戦争とは何であったか	1
第1部 戦没学生の遺稿に見る日中戦争の戦場	2
① 討伐と中国軍の抵抗	2
1. 篠崎二郎書簡	2
2. 渡辺直己日記	2
3. 太田慶一手記	3
4. 大井栄光書簡	4
② 毒ガス	4
1. 篠崎二郎書簡	4
2. 田辺利宏日記	4
③ 中国軍捕虜の取り扱い	5
1. 渡辺直己日記	5
2. 太田慶一手記	5
④ 日本軍の占領支配と宣伝宣撫工作	5
1. 篠崎二郎書簡	6
2. 渡辺直己日記	6
3. 太田慶一手記	6
4. 大井栄光書簡	7
5. 松永茂雄書簡	7
⑤ 中国・中国人観	7
1. 篠崎二郎書簡	7
2. 渡辺直己日記	8
⑥ 中国への国際的支援	9
1. 篠崎二郎書簡	9
第2部 戦没学生の遺稿に見る日中戦争が学生に与えた影響	10
① 銃後からのとらえ方	10
1. 松岡欣平の作文	10
2. 山隅観日記	10
3. 柳田陽一日記	13
4. 奥村克郎書簡	13

5. 原亮日記 -----	14
② 戦争目的 -----	15
I. アジアの団結—山隅観 -----	15
II. 日本の使命—柳田陽一 -----	15
③ 国内体制の革新 -----	16
I. 日中戦争と「新体制」 -----	16
1. 佐々木八郎日記 -----	17
2. 山隅観日記 -----	17
II. 思想統制—精神的自由の制限 -----	17
1. 柳田陽一日記 -----	17
2. 山隅観日記 -----	17
III. 統制経済—経済的自由の制限 -----	18
1. 柳田陽一日記 -----	18
2. 宅嶋徳光日記 -----	18
3. 佐々木八郎日記 -----	18
IV. 新体制運動—政治的自由の制限 -----	18
1. 松岡欣平日記 -----	18
2. 山隅観日記 -----	19
④ 新体制への批判 -----	19
I. 右翼学生運動—奥村克郎 -----	19
II. 右翼学生運動への反発 -----	20
1. 柳田陽一日記 -----	20
2. 佐々木八郎日記 -----	20
3. 奥村克郎書簡 -----	20
III. 自由と個性の尊重 -----	21
1. 宅嶋徳光日記 -----	21
2. 佐々木八郎日記 -----	21
第3部 日中戦争で戦没学生が詠んだ詩歌 -----	22
① 松永茂雄の詩 -----	22
② 渡辺直己の短歌 -----	23
③ 田辺利宏の詩 -----	24
遺稿収録戦没学生履歴 -----	25
編集後記 -----	28

はじめに

日本戦没学生というとき、当記念館の原典、『きけ わだつみのこえ』の構成も示すとおり、直近の事態—太平洋戦争から敗戦へ—と、さらに米国主体の占領も手伝って、「学徒出陣」以降の犠牲者に光が当てられるのは当然のことでした。しかし、太平洋戦争は、1931年にさかのぼる中国との戦争の帰結にほかならず、後者こそが日本の敗北を決定づけた要因だったことを再認識する必要があります。

今回の展示では、

- 1) 中国との戦争に従軍した戦没学生の遺稿をこうした観点から読み直すとともに、
 - 2) 当時は中高生であり、太平洋戦争期に戦没した方々の遺稿も分析し、
- 先の戦争の意味を見直してみたいと思います。（ただし、本館に所蔵されている遺稿その他の資料の性格上、1937年に始まった日中全面戦争以降が対象となります。）

ご遠慮なくご質問・ご批判を賜りますようお願い申し上げます。

2011年10月

わだつみのこえ記念館

中国との戦争とは何であったか

日中全面戦争は1937年7月に開始されたが、局地的戦争は1931年の満州事変（九・一八事変）から始まっている。満州事変は1933年5月の塘沽停戦協定によって一段落したが、満洲（東北）では反満抗日運動が行われ、戦争はゲリラ戦の形態をとって続いた。さらに日本は華北への勢力拡大をはかり、1937年7月の盧溝橋事件を契機として全面的な侵略戦争を開始し、中国側は抗日民族統一戦線を結成して抗戦した。日本軍は翌年10月までに華北と華中の主要地域を占領したが、国民政府は臨時首都を重慶に移して抗戦を続け、戦争は長期持久戦になった。一方、共産党は日本軍の占領地の後方に抗日根拠地をつくってゲリラ戦を展開した。日中戦争に行きづまった日本は1940年秋から東南アジアへ侵略を拡大して米英との対立を深め、ついに1941年12月、米英との戦争に突入した。こうして日中戦争はアジア・太平洋戦争の一環となり、1945年8月の日本の降伏により終結した。

第1部 戦没学生の遺稿に見る日中戦争の戦場

第1部では、高等教育機関出身の戦没将兵が残した遺稿から、日中戦争の様相を見ていきたい。常設展では、原則として提供された現物史料のみを展示しているが、この特別展では、複写資料や戦争中に刊行された遺稿集も対象とした。

具体的には、篠崎二郎書簡、渡辺直己日記、田辺利宏日記、太田慶一手記、大井栄光書簡、松永茂雄書簡を取り上げている。かれらは学生のまま現役兵として入隊したわけではなく、教員などになり、社会人としての生活をした後に、召集されて中国戦線に従軍した。

かれらの遺稿から、①討伐と中国軍の抵抗、②毒ガス、③中国軍捕虜の取り扱い、④日本軍の占領支配と宣伝宣撫工作、⑤中国・中国人観、⑥中国への国際的支援 の6つの細目に分けて、関係記述を紹介した。

① 討伐と中国軍の抵抗

日中全面戦争が開始されると、日本軍は中国沿岸部の諸都市を占領した。しかし、中国は屈服せず、日本軍に対して抗戦をつづけた。それは上海や南京などの都市においても行われたが、とくに都市近郊を含む農村部で、中国軍・中国民衆は頑強に抵抗した。

日本軍は、これらの者たちを「匪賊」と呼び、華北でも、華中でも、討伐戦を実施した。その際、軍隊や遊撃隊だけでなく、多くの住民を捕らえて殺害し、食料や燃料を略奪し、家屋を焼き払うという犯罪行為がなされた。しかし、中国の抵抗を根絶することはできず、逆に日本軍も、討伐戦において多くの死傷者を出した。

1 篠崎二郎書簡

「復興都市のN市も相変らず潜入分子活動し、全市は悪化しつつあります。上海のテロ化と相通じてみます。警備司令部だけあつて小生らの緊張特別です。…／当市と相対応して近効^{〔郊〕}の守備地区も大討伐をやつてゐます。江南地区も（全面的に重慶政府の密令らしい）活潑となりました。…／かくの如くN市を中心に江南地区は旧正を控へ緊張です。敗残兵、土匪、大刀会匪、正規軍、雑軍には閉口です。」（篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第61信1939年2月）

「最近また\／江南地区の各所の残敵殲滅戦の片割が遊撃隊と化し、都会近傍まで出沒して可成の兵力を見せてゐます。…／中隊も大討伐をやつてゐます。…最近の戦斗にまた\／十数名の犠牲者を出しました。」（篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第91信1939年）

「最近また敵の謀略行為に不眠不休の日直が続きます。隸下部隊長の失^{〔除〕}足事件、又騎兵聯隊長の戦死、暗殺事件等々・・・」（篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第100信1939年6月28日）

「当地はN市より十四里東南方山中の一寒村で附近の討伐宣撫で日が暮れます。…二里も行けば敵が絶へず遊動してゐる状態です。…／当部落にても単独外出は許されぬは勿論武装で公用に出る^{〔マフ〕}仕末です。一昨日も〇〇山に討伐、一里程離れた隣村の夜襲にも参加しました。」（篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第170信1939年12月）

2 渡辺直己日記

「生れて始めて弾丸の下を馳駆した。感じは別がない。白白とした落ちつきだ。そして物理的法則の中に微かに動いてゐる人間の小さい存在だ。後は英雄らしく笑ふだけだ。七中隊は更に部落掃討。手榴弾と軽機をぶち込んで闖入。傷ついてかくれてゐる老人、女、子供、腹部を銃剣でさされて未だ元氣を出して話す少年、窓を破ると出て来て押込んでゐる子供を抱いた母親、男は縛して大隊本部へ、女、子供は許してやる。しかし他の掃討班^{〔班〕}は可成殺したらしい。紅槍匪の部落らしい。しかし掃討は嫌になつた。武器も押収して星光を仰ぎ乍ら一里ばかりの部落へ前進。血みどろの経験、余りに儂い人間の生命、倫鎮部落は俺の頭から永久にはなれまい。」（「渡辺直己日記」1938年1月15日）

「六中隊の匪賊討伐も可成苦戦らしく増援隊が出て行つたさうである。固安、永青方面では戦死が可成出でゐる。将校の負傷もある。各沿線の兵力不足に乗じて共匪〔共産党軍〕が積極的に活躍してゐるらしい。徹底的に検挙して皆の見る所で処刑しなくては利目がないらしい。」（「渡辺直己日記」1938年5月20日）

「阜城に於ける共匪について聴く。堂々たる日本語で記された「日本軍下士官兵に告ぐ」や、統制立つた軍律、頑強な抵抗、多くの討匪戦が殆んど潰走させるのに止つて損害は部落の消失程度に過ぎないとすれば爾後の掃匪工作も容易ではあるまい。青葉の光を浴びてと云へば美しいが泥濘、炎熱、疲労、討匪行は弾送が不規なだけに一層の困難を感じしめる。」（「渡辺直己日記」1938年6月8日）

「頭髪を残した物凄^{あし}い村民が好奇心^{たちどま}にかられて佇つてゐる中を泥濘を侵し乍ら歩く。爽やかな空気に又力を出して歩く。葭^{あし}が果しなく拮つて水溜りが白く光つてゐる。疲労して蚊の中で九時過まで眠つた。だるい身に生卵をすすつて十時帰途につく。宿泊料壱円五十銭置いて昨夜の湿地帯を燬けるやうな陽を浴び乍ら進む。木陰が殆んどない一面の葭原。眼に痛い光を眺めつつ渴く喉を我慢して行く。大地それ自身が熱してゐるやうにあつい。四時間、白い雲が湧く空を背後に軍糧城へついた時は蘇つたやうだつた。」（「渡辺直己日記」1938年6月28日）

3 太田慶一手記

「城壁の南門へ歩哨に立ちました。…近辺には匪賊が横行し、絶えず討伐が行はれ、歩哨に立つてゐると銃声をきくことが毎晩の様にあります。…／非常に興味深いのは、この街に、教会兼学校があつて、英国人がかなりゐることです。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年4月29日、82、84頁）

「四月二十三日、突然、部隊が移動しました。今度は…赤化勢力の本場と云はれてゐた土地なので、いたる所匪賊があらはれ銃声がきこえ、四面に敵を控へて日夜出動の準備を忘れません。」（永井清太郎宛「太田慶一書簡」1938年5月1日、88～89頁）

「遠くに煙が見える。友軍が匪賊を見出して之を討伐し火をつけたのであらうと云はれる。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年5月10日、97頁）

「討伐隊苦心との連絡あり。…／討伐隊帰る。／今日の戦闘のはげしさを語る。／六班の斉藤三郎は戦死、口をぽつかりあけてゐる。…／夜晩くまで戦死者、戦傷者の始末に人が出入りする。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年5月15日、104～106頁）

「雨、朝北京連絡隊、護衛を兼ねて出発。途中、永青を出て間もなく匪賊の襲撃を喰つて、之を撃退するとの報あり。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年5月21日、110頁）

「匪賊は逃げてしまつてどこの部落にも居ない。部落の掃蕩。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年5月23日、111頁）

「双えい、こゝで匪賊に遭ふ。追ふ。永定河を渡る。河向ふの部落を掃ふ。我々はもどつて双えいを掃蕩。女子供の避難、高粱菓子、水郷らしき部落。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年6月6日、126～127頁）

「匪賊の方に上つてゐる日本軍の情報——掠奪、放火。／○永青の一部は日本の標識をつけた怪飛行機に爆撃された（九日）。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年6月11日、136頁）

「固安連絡を兼ねて討伐。永定河を越える。榆垓鎮、討伐と五十三人の捕虜。」（太田慶一「太田伍長の陣中手記」1938年6月14日、139頁）

「もう私も軍隊生活にも慣れましたし、匪賊討伐も度重なるに従って、面白くなって行く一方です。」
(自宅宛「太田慶一書簡」1938年6月21日、148頁)

4 大井栄光書簡

「未だ白兵をもつて格闘をした事はありませんが、逃げる敵を追ひうち、一斉射撃を命ずるとき、眼鏡にうつる彼等の姿ほどあはれなものはありません。幾人かはよろめきつつ遂にたほれふし、又瞬く間に幾人かがよろめきます。この時心の中ではいつも「東洋平和の為に！」と切ない気持がおこります。が敢然として新しい目標に射撃命令を下します。」(眞柄兄・姉宛「大井栄光書簡」、1940年、38頁)

「…そんな戦闘の最中でも、僕などは「東亜の安定の為」であるとか、東洋平和の為であるとか、何か僕のイデオロギーをもつて戦闘し、その心情たるや仲々高尚！^(備)なものであります。が敵の弾は実に心にくい迄に容赦なく友軍を傷け全く薄情なものです。兵は殆ど敵概心の権化と化し、一意努力します。戦闘中は大概是単に戦友の仇をとるといひつつ戦闘しますし、又それがある程度正当化される程、切迫した生死の間を往来します。殺すか殺されるか、が結局戦闘の実相ですね。」(弟宛「大井栄光書簡」、1940年7月9日、41～42頁)

「こちらへ来て一回討伐に出ましたが、それは大井少尉が指揮する一小隊で実施されました。一行程十数里にわたる遠距離を夜中に出かけて夜襲して、絶大の戦果をあげました。」(弟宛「大井栄光書簡」、1940年、51頁)

② 毒ガス

日中戦争当時、毒ガスの使用はすでに国際法によって禁止されていた。ここで取り上げた資料には毒ガスを使用した記述はないが、日本軍兵士が行った毒ガス戦の訓練の様子が記されている。田辺利宏日記で言及されている「赤筒」とは、くしゃみ性のガス「ジフェニール・シアンアルシン」のことである。

天皇の意向を受けて大本営が出した命令、1938年4月11日の「大陸指110号」と1938年8月6日の「大陸指215号」で、あか筒、あか弾の使用が許可された。その際、ガス使用の事実をかくし、その痕跡を残さないよう、特に外国人に気づかれないように注意することとされた。それ以降、中国の戦場で日本軍はくしゃみ性のガスを大量に使用するが、さらに致死性の毒ガスを使うこともあった。

1 篠崎二郎書簡

「当部全員の化学戦訓練があり、朝からトラックで出かけました。当市より七里山に入った部落附近の台地で実施されました。…今は守備隊になつてゐます。大都会とちがつて、兵隊も農民同様の生活、随分勝手なことも出来る様です。農民の若い娘などにからかつたりなどして…」(篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第57信1939年2月17日)

「兄からは愈々健在にて国策に副^そふべく化学戦に万全を期してゐる旨、便りありました。」(篠崎寿子宛「篠崎二郎書簡」第89信1939年5月)

2 田辺利宏日記

「つめたい雨。今日は管内で天幕を敷きガスの学課。何か心の底の方で、砂の様に崩れてゆくものがある。」(「田辺利宏日記」1940年5月14日)

「午後北方の畑の中の小さい廟で赤筒を焚き、初めてガスの中に入る。左から指を入れると思つたより多量のガスが入りそれを吸ひこんでしまったので二分后出た時の苦しさはひどいものだった。咽喉がひどく刺激され涙が出る。鼻汁が出る。唾液が出てくる。胸がむか／＼して、あげそうになる。畑の中に坐りこんで、それらのものを排除するのに骨が折れた。人間は何といふひどいものを作るのだ